

素敵な近所さん計画

人にとって、空き地とは様々な可能性を与えてくれる場所である。現在空き地が減少する一方、どんどん増えてゆくのが空き家である。そこで、今深刻な問題となっている、利用されることのない空き家を再生し、空き地にするという、地域で取り組む新しい企画「素敵な近所さん計画」を提案する。

[きっかけ]

市街地にちらほらみかける空き家。小さい頃から周りの大人や学校の先生などに、危ないから近寄ってはいけないよ、と教えられてきた。近所の人たちはそこを避け、空き家周りは孤立している。

昔、私が小学校の低学年の時、防犯の授業で通学路や脇道などを先生や大人と児童達で歩いたことがある。危険なところや不審者がよく出るところなどを教えてもらったり発見したりして、防犯の意識を高めるという内容のものだ。空き家の前を

通りかかったとき、大人達はそこを指し、

ここは危ないねと話した。その空き家は住宅街の中に建っていた。手入れがされていない屋根や壁があちこちガタつき、周りの住宅の住居者の目があるとも茂った雑草の影は死角で溢れ、たしかに犯罪や事故が起きやすいだろうと思った。しかし昔から危ないと言われ続けているにもかかわらず、空き家はなかなか無くならない。地域に気を回さなければいけない場所があるとどうにも安心できないし、疲れる。そんな空き家があることは暮らしにおけるデメリットとなっていた。

私は当時の疑問を思い返し、この空き家をよい方向へ転換できないものかと考えた。



[昨今の空き家事情]

現在、全国には852万戸の空き家や空き室があると言われている。東京でさえおよそ35万戸の空き家があるとされ、その割合は11%。老朽化が進んで危険な状態だという。空き家が無くならない理由としては、

- ①利用予定はないが、家を残しておいた方が固定資産税が軽くなる
 - ②実家を相続したが居住していないため管理できない
 - ③所有者が高齢で、体力的に管理が難しい
 - ④家主が亡くなったが相続する人がいない
- などが主に挙げられている。

深刻化する空き家問題に、対策として条例や法律、空き家管理代行サービスといったビジネスが出来始めている。管理を怠る所有者に罰金が課せられたり、業者に空き家を管理してもらうことで、管理されない空き家を減らそうというものだ。しかし、空き家を管理する仕事ができたとはいえ、利用価値のないまま残っている土地を保存しておくだけというのはあまりにももったいない。利用者のいないこの空間は、私には「空き地」に思えた。

[空き地の可能性]

現在の日本には人口に対する公園が少ない。このような状態で、私が特に懸念したことは地域や自分自身とコミュニケーションの弊害が起こることである。今の子供達には居場所が少ない。遊びや人付き合いは学校内や友人宅など限られた範囲で行えなくなってしまっている。同世代以外の知り合いがいないという人も多いだろう。個人的な空間に籠ると特定の作業しかできずに考えが広がらず、自発性も生まれにくい。これらの環境は成長への障害物になると感じた。様々な事象を受け入れ、作り出すことによって自身を伸ばしていける空間として、空き地が必要である。公民館なども違う、施設ではないもっと野性的なコミュニケーションツールが必要なのだ。

[提案]

もし、周りの空き家が人々にとって大切な場所になれば、素敵な近所さんとなっていこう。

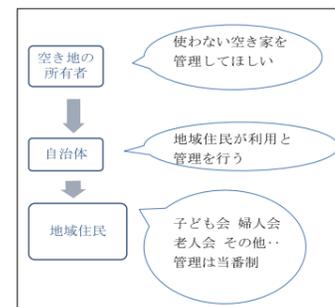
そこで私は自宅や施設以外の人の居場所を作るために、空き家の所有者や自治体と協力して近所の空き家を再生し、自由な場として活用する「素敵な近所さん計画」を提案する。

[計画内容]

この「素敵な近所さん計画」は、空き家の所有者の許可を取り、空き家の手入れと管理を地域住民が行う代わりに空き家を自治体に貸してもらうという取り組みである。空き家を住居として扱うわけではないため、所有者が突然空き家を必要とし、返してほしいと言っても問題なく開け渡すことが可能だ。

空き家の管理は老人会、婦人会、子ども会などの団体が交代で管理したり、回覧板で当番を回していくと良いと思う。地域住民の中でも、ぜひ初めに取り組んでもらいたいのは地域の子ども会などの好奇心や行動力に溢れる若者たちだ。保護者と一緒にこの地域の現状を知ってもらった上で、自分たちに心地よい環境のあり方を模索してほしい。

所有者の許可が得られたら、まず手入れをしよう。



伸びきっている草木を刈り、ガタついた建具や屋根などを直していく。知らない植物や動物が出てくるかもしれない。親や友達など、いろんな人を誘って開拓していこう。

扉や襖などの仕切りはすべて取り外してしまいたい。区切りのないシンプルな空間はどんな形も生み出しやすく可能性が広がる。開放された中、どこからでも居る人の姿が見え、気兼ねなくその空間に入っていけるようにしたい。

電気もガスも水道も、空き家なら通っていないことだろう。老人会のおじいさんおばあさん達の知恵を借りようか。とても良いアイデアが生まれるかもしれない。知人が知人を呼べば、そこは知恵の大団円だ。環境に合わせた取り組みをするのもなかなか無いチャンスだろう。

家の壁などの間取りはそのままに。遊びも秘密基地も、その環境からできることを考えよう。自発性も育まれることだろう。

人が入れるようになったらあとは自由だ。

子供達がかくれんぼを始める。近所の奥さん方が井戸端会議にやってきた。いらないものを持ち寄って交換し合っている。

庭には、マンション住まいのおじいさんがいきいきと土いじりに来ていた。そこに咲いた綺麗な花を眺めたり、一緒に世話したいと話しかけてみるのもいいだろう。

年上がいたら宿題を手伝って欲しいと泣きつこう。

ちょっと一人で寂しくなったら、誰かいるかもしれないあの家に向かおう。兄弟のような仲間と過ごせる。

プチ合宿ということで、みんなで肝試しや寝ころがりになるのも素敵だ。

今日はどんなことをしようか。周りのひとを巻き込んで歌ってみるのもいいかもしれない。

毎日が驚きと発見と可能性で溢れていく。

みんなで作るみんなの「居場所」。いろんな空き家が空き地になれば、地域はもっと明るくなるはずだ。

